

P2-394 切迫早産症例に対する塩酸リトドリン、硫酸マグネシウムによる tocolysis の検討

兵庫県立こども病院周産期センター

猿渡由美子, 原田 明, 近田恵里, 新谷 潔, 石原尚徳, 佐本 崇, 大橋正伸

【目的】切迫早産症例に対する塩酸リトドリン及び硫酸マグネシウムの tocolysis 効果について検討した。【方法】妊娠 20 週から 33 週の切迫流早産症例に患者の同意を得た上で無作為的に tocolysis を塩酸リトドリンにより開始する群 (R 群), 及び硫酸マグネシウムにより開始する群 (M 群) に分別した。その後単剤投与での tocolysis 困難例や副作用の出現例に対しては両剤併用とした。【成績】R 群が 40 例, M 群が 35 例であった。Tocolysis 開始週数, 母体年齢, 頸管長, 母体白血球及び CRP 値に有意差は認められなかった。分娩週数は R 群が 30.5 ± 3.7 週, M 群が 32.7 ± 3.8 週となり ($p=0.083$), 分娩に至った週数について 28 週未満, 32 週未満, 34 週以降で両群に有意差は認められなかった。また妊娠延長期間については R 群 19.2 ± 21.5 日, M 群 26.4 ± 25.5 日 ($p=0.34$) となり, M 群に妊娠期間の延長化がみられる傾向にあったが有意差は認められなかった。単剤では十分な tocolysis が得られず両剤併用とした症例は, R 群では 40 例中 11 例 27.5%, M 群では 35 例中 8 例 22.9% となり有意差は認められなかった ($p=0.664$)。また副作用のために両剤併用とした症例についても R 群では 10 例 25%, M 群では 3 例 8.6% となり同様に有意差は認められなかった ($p=0.132$)。出生児の体重は R 群が $1,554 \pm 546.3$ g, M 群が $2,052 \pm 646.8$ g となり有意に M 群が高値であった ($p=0.013$)。【結論】切迫早産症例に対して tocolysis を塩酸リトドリンで開始した群と硫酸マグネシウムで開始した群に分け分娩週数, 妊娠延長期間, 単剤投与を中止せざるをえなかった症例について検討したが有意な差は認められなかった。出生体重は硫酸マグネシウム群で有意に高値であった。

5 日火
一般演題**P2-395 子宮筋収縮に対する喫煙の影響**

関西医大

安田勝彦, 中元 剛, 安原正浩, 堤 明裕, 溝上友美, 中元章恵, 小野淑子, 中嶋達也, 依岡寛和, 神崎秀陽

【目的】これまでの研究で我々は, 喫煙が妊娠子宮筋の易刺激性を高めること, さらにオキシトシンに対する感受性ならびに反応性を亢進させることを報告した。今回, この喫煙の影響がタバコ煙に含まれるいかなる物質によるものかを検討するため, タバコ煙抽出液の子宮筋に対する影響を検討した。【方法】妊娠 16 日目のウイスターラットをエーテル麻酔下で屠殺し, 子宮縦走筋標本を作製した。これら子宮筋にタバコ煙抽出液 10^{-2} ~ 10^{-7} 本/ml (終濃度) を添加し, 37°C , 5% CO_2 混合ガスの条件下で overnight incubation を行った。処理後, 筋標本をマグヌス管内に 1g resting-force で懸垂し, 安定化した後にオキシトシンに対する反応性ならびに筋収縮曲線を観察した。尚, 本研究は当大学の医学倫理委員会ならびに動物実験委員会の承諾を得ている。【成績】タバコ煙抽出液群では 10^{-2} 本/ml ではオキシトシンに対する感受性は対照群と比較して低下していたが, 低濃度になるに従い高まる傾向にあり, 10^{-7} 本/ml では対照群と比較して有意に感受性があがっていた。また収縮頻度も増加する傾向が認められた。しかし, 収縮強度には差を認めなかった。【結論】低濃度のタバコ煙抽出液は, ラット妊娠子宮筋のオキシトシンに対する感受性を亢進させたことから, 喫煙における流早産の発症にタバコ煙中の物質が直接的に子宮筋に関与している可能性があることが示唆された。今後は, タバコ抽出液中のどの成分が影響しているのかを調べていく必要がある。

P2-396 経陰超音波検査による頸管短縮検出率についての検討—妊娠 20 週, 30 週, 自覚症状出現時の比較—

佐賀県立病院好生館

渡部友希子, 西田純一, 野見山亮

【目的】子宮頸管長短縮は早産予知の重要な検査所見であるが, 一般に自覚症状に乏しく, 検査適応について現在明確な適応はない。しかし細かな自覚症状としては子宮収縮の増加や帯下の変化が報告されており, これらをスクリーニング方法として用いることで妊娠 30 週未満での頸管短縮例を検出できるか否かを検討した。【方法】当科で妊婦健診を受けたローリスク妊娠例 (236 例) を対象に, 妊娠 20 週から 30 週において, 子宮収縮の軽度増加, 痛み, 帯下の増量, 水様帯下の出現を自覚した時点で経陰超音波検査による頸管長計測を施行した。妊娠 30 週では全例に頸管長計測を行った。頸管短縮は 25mm 以下と定義し, 陣痛発来が疑われた例は除外した。スクリーニング方法として自覚症状を用いた場合の 30 週未満での頸管短縮例に対する感度, 特異度, 陽性適中率, 陰性適中率を算出した。また, 自覚症状を有する症例の相対危険率と 95% 信頼区間を算出した。【成績】スクリーニング方法として自覚症状を用いた場合の 30 週未満での頸管短縮例に対する感度は 47%, 特異度は 22%, 陽性適中率 94%, 陰性適中率 18% で, 自覚症状を有する症例の相対危険率は 2.9, 95% 信頼区間は 1.3~6.4 であった。【結論】ローリスク妊娠における経管短縮例を検出するために, スクリーニング方法として自覚症状を用いることは, 有用であると考えられた。